

# 瞎道本光『大智偈頌関東辯矣』の研究

菅原研州

## 一、はじめに 先行研究の確認

本論は、江戸時代中期に活動した学僧・瞎道本光（一七〇〇～一七七三、指月慧印の資）の著書である『大智偈頌関東辯矣』（以下、『関東辯矣』、または本書と略記）の研究を通して、瞎道の初学者教育について検討するものである。なお、瞎道に関する先行研究は、以下の諸論を挙げておきたい。

・河村孝道 「『正法眼蔵却退一字参』について」

同 「『正法眼蔵生死卷穿牛皮』『正法眼蔵都機卷

秃若掃記』に就いて」

ともに『菟書大成』卷一八所収

瞎道本光『大智偈頌関東辯矣』の研究（菅原）

・伊藤秀憲 「瞎道」、『道元思想のあゆみ3』吉川弘文館・一九九三年、所収

・松田陽志 「瞎道本光の五位説について——『曹山解釈

洞山五位顕訣鈔』について」、『宗学研究』

四五、二〇〇三年

同 「瞎道本光の『五位顕訣』解釈——偏中至説

と「功」の解釈をめぐって」、『宗学研究紀

要』一六、二〇〇三年

特に、河村先生の「『正法眼蔵却退一字参』について」

には、瞎道の著述からまとめた略年譜が掲載されているため、主として参照している。伊藤先生の論文は『正法眼蔵』註釈関連で、松田先生の論文は「五位説」関連である

瞎道本光『大智偈頌関東辯矣』の研究（菅原）

ため、部分的な参照に留めている。

また、『大智偈頌』に関する研究や著作は多般に渉るけれども、本論では以下の二本を重点的に参照している。

・飯田利行『大智偈頌訳』国書刊行会・一九七八年

・山口晴通「大智禪師偈頌研究の一考察」、『印度学仏教学研究』一七七一、一九六八年

これらは、『大智偈頌』自体の解釈に關連して参照している。

二、『関東辯矣』解題

『関東辯矣』であるが、瞎道が祇陀大智（一二九〇〜一三六六）の『大智偈頌』全二二九首に対して註釈を行ったもので、先行研究では宝曆一三年（一七六三）瞎道五四歳の時に、著作が成ったと指摘されている<sup>①</sup>。なお、瞎道自身は経緯を以下のように述べる。

寛保元年辛酉冬ノ中ニ、武野崎玉郡北根ムラ、清法寺ニテ、妄説ヲ試志ストイヘドモ、眞ノ狂言ニアラサレバ、ソノマ、ニシテ棄ケリ、頃年ワカ左右ノ、萬功大莖通禪等シキリニコレニ夜話を責ム、諾シテハ止ミ、

マタ責ムルニ、應ズトイヘドモ、イマタ筆舌ヲ鼓セズ、今冬コノ會ニ穀賊子トナレルチナミニ、左右ノ良秀良州ナルモノ、コレヲ聞シテ、思惟シ、マタ修行セハ、遂ニ三摩地ニ入シ、師ソレコレヲ夜坐ノ餘暇ニ示教利喜セヨ、ワレラカ黨ノ初心モノ、ミナコレニ同心ナリト、予コ、ニコノ関東辯矣ヲ筆舌ニ寄セテ、カラカ責ヲフサグ……<sup>②</sup>

ここから、寛保元年（一七四一）に清法寺（埼玉県鴻巣市北根に所在）にてとりあえず著したようだが、それからしばらく捨て置いて、後に門弟など周囲の者からの働きかけもあって、『関東辯矣』が成るに至ったという。

大智和尚偈頌 関東辯矣、イマ参ズル予ハ、固ヨリ関東辯矣ナレバ、モテ名トス、癸未霜月十二<sup>③</sup>

本書冒頭に右記のようにあって、癸未（宝曆一三年・一七六三）の霜月（十一月）一二日に成立したと、本書題名が、著者瞎道の出身地や方言に由来することが示されている。瞎道は、その伝記の詳しいものは残っていないけれども、現在の埼玉県で俗姓・新井氏に生まれた<sup>④</sup>。

また、今回の研究では、愛知学院大学図書館所蔵本を用

いる。本書は、上中下の三巻の内容を全六冊に分けて書写したもので、各冊奥書から以下ことが知られる（なお、改行等は一字空けで示した）。

第一冊（全四七丁）・明和八辛卯天 仲夏安居日 智琢敬書

第二冊（全三五丁）・明和八辛卯天安居日 肥前諫早産 普英記書之

第三冊（全四九丁）・明和八辛卯天 孟夏安居日 西肥産 瑞雲假書寫

第四冊（全四五丁）・明和八辛卯天 孟夏安居日 良逸謹書

第五冊（全三七丁）・明和八辛卯天 仲夏安居日 江春敬書

第六冊（全五四丁）・明和八辛卯天 安居日 西肥廉錦波産人 智静敬書

以上から、本書は明和八年（一七七二）の夏安居中に書写されたものである。また、書写した六人の名前が見え、一部の書写者は出身地を記載しているけれども、これは現在の佐賀県南部（廉錦波は現在の同県鹿島市に流れる錦波

晴道本光『大智偈頌関東辯矣』の研究（菅原）

川周辺と推定）から長崎県諫早市にかけての地域と思われる。経緯は不明だが、同郷の者達が共同書写した写本だったと推定できる。

なお、書写された場所は書かれていないが、筆者の中に肥前国出身者が複数いることを思うと、江戸駒込吉祥寺栴檀林内での書写も考えられる<sup>(5)</sup>。また、晴道『真性頌』の『曹全』収録本には、末尾に募刻識語が記載<sup>(6)</sup>されており、晴道やその門弟に縁のあった者達の名前が列記されているけれども、その中の名前と右記六人は一致しなかった。

それから、本書には序・跋文等は無く、著者名についても明記されていないが、第五冊に「本光シタシクコノ洞峯ノ門境ヲシル<sup>(7)</sup>」とあり、第六冊には自ら宝暦元年（一七五二）に『略述赴粥飯法』を記したことを述べるなど<sup>(8)</sup>、明らかに晴道本人の著作である。書名について外題は『大智偈頌関東辨』と表紙に直接書かれるのみだが、内題は『大智（和尚）偈頌関東辯矣』であり、本論では後者を用いた。各巻に収録される偈頌の配分は、上巻七六首・中巻七七首・下巻七六首で計二二九首となり、一般的な『大智偈頌』と同数である。

なお、本書執筆のために瞎道が参照した原本がいずれのものか、直接の言及を確認することはできなかった。ただし、関連する記述として、以下の数節がある。

・箴ノ巻ノ中ヨリヌスムナリ、冠中（原文ママ、冠註の誤記）ニモ正法眼蔵坐禪箴ノ頌トアリ、シカアルベシ。<sup>9</sup>

・コノ雙谿ハ新羅曹谿ナリト、其イハクハ冠註ニミヨ、宝林傳、曹谿山、在新羅國、隔谿、雙峯相對作雙谿、シカアレバコレハ新羅ノ曹谿ナルコトアキラカナリ。<sup>10</sup>

・上瑩山和尚、三首ヨロシク冠解ヲミルベシ。<sup>11</sup>

・上東明和尚、コノ禾上ノ消息ハ、冠註ニミルヘシ。<sup>12</sup>

・香巖ハコ、ニ記志セス、冠註ニ増補誌ス。<sup>13</sup>

・冠解ニ性空妙音首座ノ事ヲ引證ス。<sup>14</sup>

これらの記述から、「冠註本」（延宝二年「一六七二」刊か、同書に瞎道が増補したもの）を参照していた可能性を指摘するものである。

### 三、瞎道の『関東辯矣』執筆態度について

瞎道には『大智偈頌』への註釈書として、明和九年（一

七七二）二月に撰述された『大智禪師偈頌参註一著落在参（以下、『大智偈頌参註』と略記）』（全三卷）が『曹洞宗全書』「注解三」巻に収録されているため、よく知られている。本書との主な同異点は以下の通りである。

①『大智偈頌』全二九首への註釈であることは同じ。  
②重要な字句へ懇切詳細なる註釈を付していることは同じ。

③「初学者」向けの撰述であることは同じ。

④『大智偈頌』各頌に題がある場合、その註釈を行つてから、頌本文の註釈を行うことは同じ。

⑤『関東辯矣』が和文体、『大智偈頌参註』が漢文体であり異なる。

⑥『大智偈頌参註』の末尾には「偈頌或問」が附録されているが、『関東辯矣』では偈頌という語句への註釈を通して、冒頭に簡潔に示されるのみであり異なる。

さて、上記の内、特に注視すべきは、③であろうと思われる。③については、本書の性格を知る上で重大な観点である。『大智偈頌参註』においては、江戸靈雲院・義璞性山による序文に、「本光老人、曾て此の偈頌に参熟して、

眼光紙背に透る。黙止するに忍ばず、初学者の為に能く之を説破す<sup>15</sup>とあって、初学者向けの内容であることを明記し、また本書については本論「二」に引用した撰述経緯にその性格が明らかである。この点は後に詳述したい。

⑤については、周知の通り瞎道の『正法眼蔵』註釈である『正法眼蔵却退一字参(『正法眼蔵参註』)』の重大な問題の一つに、同著では和文で書かれた仮字『正法眼蔵』本文を漢文に直してしまったことが挙げられる。ただし、本書は当初より漢文の偈頌を註釈するものであり、『正法眼蔵参註』とは同一に扱えない。

それから、本書は『大智度論』の註釈を通して、瞎道の「坐禅観」「修証観」「正法眼蔵」観」「嗣法観」等、複数の知見を得ることが可能であるため、それらは各論として論じたい。

#### 四、本書における註釈態度について

それでは、本書における瞎道の註釈態度について、曹洞宗の宗風に関わる二首を材料として検討してみたい。まず、『大智度論』には「蘆月菴(二首目)」や「答洞上宗

瞎道本光『大智度論関東辯矣』の研究(菅原)

要」に洞上の宗風に関する指摘がある。その提唱を見ながら、瞎道の態度を確認したい。

まず、「蘆月菴」だが、冒頭の一句は「洞上家(『続曹全』所収本は「宗」)風最尊貴」から始まるが、同句に対して以下のように註釈する。

シルベシ最尊貴ハ、尊貴ノ染汚ナシト、最トハイチバ  
ンカケナリ、モトモ尊貴ヲ守ラザルナリ、守スルモノ  
ワ洞門外ノアダ人ナルベシ、シカアルニヤ。<sup>16</sup>

このように、「最尊貴」という語句の忠実なる意味を採り上げるのではなく、高い宗乘眼から「最尊貴」を読む時に分別へ墮落しないよう注意していることが分かる。同じく「答洞上宗要」は以下の通りである。

モシ洞上ニ宗要ナシトイハズ、イカ、コタエン、アリ  
トイフトモ、マタイカ、コタエン、タ、コレ宗要響ト  
イハンモノカ。<sup>17</sup>

こちらにも、素直に洞上の宗要を宣揚するのではなく、宗要の有無を問いとして提示し、学人の安易な理解を敢えて妨げている。よって、本書における註釈態度は、従来多くの言及がされている『正法眼蔵参註』や、『永平広録点茶

湯』といった他の註釈書同様に、高い宗乗眼から行われていることが分かる。何故、初心者向けといいながら、高い宗乗眼からの註釈がされるかといえば、『大智偈頌』そのものに対する瞎道の評価から理由を得ることができる。

サラニコノ偈頌ノ寂然照著ハ、一時ノ位ニテ、祇陀禾尚ノ自受用三摩耶ナリ、シカアレハ因縁時節ノ中ニアリトイヘドモ、使得劫波ノ三昧ヲ、ヨロシク學習スヘシ。<sup>18</sup>

つまり、偈頌に表詮されている寂然照著たる悟りの境涯は、祇陀和尚（大智）の自受用三昧であるという。そして、その三昧を学ぶように門人に促しているのである。よって、文字言句の素直な註釈をしまえば、結局はその文字に拘泥して三昧の把握ができなくなるために、敢えて高い宗乗眼から曹洞宗の宗旨を宣揚しているといえ、それが、本書の基本的な註釈態度である。一方で、初学者向けの文脈も、複数見出すことが可能である。

## 五、本書における初学者への配慮について

既に論じたように、本書は初学者向けという一面を持つ

ている。そこで、瞎道が初学者に対して、どのような配慮をして註釈しているか見てみたい。

### ①語に対する懇切丁寧な註釈

迦臘波ノ譌略音ニハ、劫波トイフ、マタ略シテ、劫トイフ、コ、ニ長時トイフ、ツマリイハ々、無時ナリ、キノフ、ケフナリ。<sup>19</sup>

いわゆる、サンスクリット語のカルパ (kalpa) についての音写である「迦臘波」から始まって、別の音写を紹介し、略した語句を紹介し、更に中国・日本語圏での意味を指摘し、最後に宗乗からの提唱を挙げている。音写などで学人が意味を把握できないことへの配慮である。

一世二擅、ストイフカ、擅ハ自専也ノ訓詁ヲシルベシ、ホカノモノ、ナラヌコト、ワレバカリナルヲイフモノカ。<sup>20</sup>

こちらは、漢語に対する丁寧な註釈であり、敢えて和語を用いることで意味を正しく伝えようとしている。永平道元も、『正法眼蔵』「仏性」巻で、趙州狗子仏性話について「狗子とはいぬなり<sup>21</sup>」とするなど、まれに懇切丁寧な開示が見

られるが、同様の振る舞いを瞎道も行っているといえる。

## ②更なる参究を促す参考文献の紹介

即心即佛、〈中略〉塵劫ノ操持ヲワスルベカラズ、修證不染汚ナルコレ即ナリ、進趣ナキ底ヲ、即トヲモヘルハアヤマレルナリ、一向ニ、未發菩提心ナルヲ即心即佛トヲモフハ、心佛ニ愚ナルノミナラズ、即是ニ暗昧ナリ、ヨロシク吉祥祖翁ノ正法眼藏ヲ折開シテ是即スヘシ。<sup>(22)</sup>

『大智燭頌』には「即心即仏」と題される燭頌が二首収録されているが、その第一首目に対する提唱である。道元『正法眼藏』「即心是仏」巻を踏まえつつ、学人が誤りがちな「即心即（是）仏」や「不染汚の修証」について注意をしながら、道元の著作を紐解いて学ぶように促しているのである。このように、『大智燭頌』の註釈を行いながら、他の著作まで広く学ぶように提示する例は、以下の通りである。

・第一冊・四〇丁裏、真歇清了『劫外録』一卷  
時期的には、明和丁亥（一七六七）の面山重刻本ではな

瞎道本光『大智燭頌関東辯矣』の研究（菅原）

く、寛永七年（一六三〇）中野市右衛門版であると思われる。

・第一冊・四二丁裏、投子義青『投子録』

後に紹介するが、面授嗣法論との関わりで強い疑義が呈された本書については、解題を含めて注意がされる。

・第二冊・二八丁裏、面山瑞方『訂補建撕記』二巻、宝曆四年（一七五四）版

道元に関わる伝記を採り上げる際に、参照すべき文献として、瞎道は面山訂補の同書を提示する。瞎道は以前から面山と法盟を結んでいたと思われる。<sup>(23)</sup>

・第四冊・二三丁表、道元『正法眼藏』「坐禅箴」巻、瑩山『坐禅用心記』

禅に関する提唱を進める際に、宗門坐禅書の第一である両祖の著作を挙げています。特に、前者の道元「坐禅箴」巻は単伝の禅を示すために、後者の瑩山「坐禅用心記」は綿綿密密なる禅を示すために提示された。後者については、延宝八年（一六八〇）の卍山道白開版本が知られ、当時の学人の手に渡ったものと思われる。

・第六冊・四五丁表、道元『正法眼藏』「袈裟功德」二伝

衣一巻

袈裟に関する提唱の際に、これら両巻を「焼香シ、礼拝シ、看讀スベシ」と提示した。その内容は、袈裟について誤った理解を防ぎ、誤った取り扱いを避けるためであり、宗意・儀規両面を学ぶ典拠として提示されたものである。後述するが、『正法眼蔵』については、当然のように提唱中に組み込まれており、瞎道の周囲の学人は容易に手にできる環境であったことが窺える。

・第六冊・四九丁表、『三千威儀経』、「四律五論」、南山道宣『教誡律儀』

鉢盂作法に関する提唱で、右記の律関係の文献を提示。

③書籍に対する解題

前項で紹介した『投子録』についての解題は、「面授」に関連して学人の誤解を防ぐ意味でも重要だったと思われる、以下のように提示される。

コノ投子ハ、山ノ名テ、開山ハ大同古佛ナルベシ、而今ハ義青和上ナリ、コノ師ノ語ハ、和本アリ、オヨソ三本ハカリアルガ、ミナ不信ナリ、中花ノ録の中ニ

モ、價偽ノ本ヲホシ、父子ノ血脈ノ通スルヲ參ゼヨ。<sup>24)</sup>

注視すべきは「父子ノ血脈ノ通スルヲ參ゼヨ」で、これは江戸元禄期以降の「宗統復古運動」の影響を見ていかなばならない。宗統復古運動で、曹洞宗では一師印証・面授嗣法を嗣法の基本に据えて、その後の是とした。その際に問題になったのが、中国曹洞宗の投子義青（一〇三二〜一〇八三）である。投子の嗣承をめぐることは、既に無数の議論がある通り、大陽警玄（一浮山法遠）―投子義青が史実であって、臨済宗の浮山を介した「代付」であったと知られる。しかし、それが面授嗣法に反することから、江戸時代当時の宗学者は苦心して、大陽―投子が「面授であること」を論証しようとした。その努力の際たるものが、面山瑞方『洞上金剛杵』<sup>25)</sup>である。<sup>26)</sup>面山は同著において、様々な史伝の引用と、その会通を駆使して大陽―投子の面授の論証を試みたのだが、同時代に問題になったのが『投子録』であった。特に享保一〇年（一七二五）刊行の同著に収録された「行状」は明確に「代付」を謳っていた。それにも関わらず、当時の学僧であった廓門貫徹が後序を認めるなどしたため、面山は元文六年に刊行した『洞上金剛杵』を宝



曆五年に再刊し、その際に『投子録評』を付して注意を促したのである。瞎道は、面山の意向を汲む形で先の提唱を示しており、初学者が「代付」に陥らなくするための方便を垂れたと見るべきである。

他の解題は左記の通り。

・第一冊・三七丁表、『華嚴經』

『華嚴經』に訳本の違いで、様々な巻数があることを簡潔に指示。

・第一冊・三八丁表、『法華經』

鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』に関する簡潔な解題を付す。

#### ④儀規に関する解説

初学者向けという観点から、儀規に関する解説があることも指摘しておきたい。

『大智度論』に見える「叉手当胸」を踏まえて以下のよう提唱される。

マツ叉手ノ同名異體アルヲシルヘシ、圓覺經ナドニ、  
叉手トアルハ、イハユル金剛合掌ナリ、而今ノ叉手  
ハ、シカニハアラズ、(中略) 禅苑清規(二三四号)

瞎道本光『大智度論関東辯矣』の研究(菅原)

ニ叉手当胸ハ右手ヲ握テ上ニ在リ、(中略)コレ叢林ノ公儀ナリ、ソノ儀ヨロシク、儼然ナルベシ、叉手ヲ腰下ニサゲザレ、腰下ニサガルヲ随藏叉手トイフ、必ズシモコ(レ)ヲ諱忌セヨ。

このように、懇切に儀規の内容を提示され、その出典も明示されている。また、正しい作法と、誤った作法の違いについても厳しく定めている。

他の儀規についても以下の内容が確認される。

・第二冊・六丁裏、「大坐」の語に関連して坐相の解説

・第五冊・三五丁表裏、「法戦場」の語に関連して法戦の解説

・第六冊・四四丁表裏、「蒲団(坐蒲)」の真意の解説と、「吉祥坐」に関連して坐相の解説

#### 六、本書における瞎道の坐禅観・修証観

『大智度論』には、「坐中有感(四首)」が収録され、その註釈を通して瞎道の坐禅観を知ることが可能である。

コノ心空ハ思量箇不思量底ノ、非思量ナラン、ソノ非思量ノ境、モトヨリ寂ナリ。

瞎道は「非思量の坐禅」を強調する。当然に、道元『正法眼蔵』『坐禅箴』巻などの影響を受けてのことだが、瞎道にとって坐禅は「寂」の極致であり、その寂をもって一切の存在を実相として証す意図があった。よって、「兀兀地」も強調される。

コレコノ坐中有感ノ句、コレ得本ナランカ、休萬機ハ、ヨノツ子ノ機智巧辨ヲ休息スル、コレ兀、地ナリ。<sup>30</sup>

坐中有感の句を本、つまりは真実を得ることとし、その上で常日頃の機知や巧弁を休息する兀兀地を強調しているのである。この点から、瞎道は宗門の坐禅を、退歩の学道として正確に把握していることが理解できる。

その上で、修証観を確認しておきたい。瞎道は、『大智偈頌』の「始本元来只一心」について、以下の註釈を行っている。

ナニカ始、ナニカ本ナルト、尋思求覓スルニ、タツタ覚ナル、一心バツカリナリ、イマ元来トイヘバトテ、八万劫ノ本劫本見ニテハナシ、コノ一心、マタ眞如門ナリ、莫妄想ノミ去々来々ヒトシク、不變易ナル、ア

二本覚ナラズヤ、直ニソノ隨變而如去、ソノ始覚ナラシ、サラニ実ヲシラントナラバ、初心ノ辨道、ソノ本證の全體ナリ、モト修セザルニハ、アラハル、コトナキハ、始ナリトモ、本トナルベシ。<sup>31</sup>

本覚・始覚の問題について言及する中で、その「実」について論じた際に、初心の弁道が本証の全体であることや、その本証が修行をしなければ顕れないことを、道元『弁道話』から導いて述べている。つまり、修行と関わらない状況での実体的な本証を認めていないのであり、修行を重く見ていると考えられる。更に、次の一節も参照しておきたい。

宗門ノ眞龍ハ、ソノ彫龍ヲ忌諱スルニハアラズ。<sup>32</sup>

この場合の眞龍とは、真実そのものを意味しており、彫龍とはそれをかたどつたものである。つまり、真実の悟りはそれをかたどる修行を忌避しないこと、端的に修行に重きを置いた修証一等を説くものとして理解して良い。

同じく、「不染汚の修証」の語句は本書の多くに見ることが可能で、分別を容れない修証を瞎道の立場として取り入れていたことが窺える。

## 七、本書における瞎道の『正法眼蔵』観

瞎道は、二三歳の時に初めて『弁道話』に参じて後、その後晩年に『正法眼蔵参註』を大成するに到るまで、諸語録・五位思想などへの提唱・註釈などを数多く行うが、「その主軸を成したものは『正法眼蔵』であり、且つその思想・信仰のグルンドを成したのも亦實に『正法眼蔵』であつた」と先行研究で指摘される。<sup>33)</sup>そして、本書においてもその通りである。

まず、瞎道は『大智偈頌』『賀永平正法眼蔵到来』を註釈して以下の通りに述べる。

ナン卷アルベシトイエトモ、正法眼蔵ハマコトニ賀到  
来ニ親切ナルモノナリキ。<sup>34)</sup>

つまり、その編集に関わらず、『正法眼蔵』全体を、賀し尊崇する宗典として扱っていることが窺える。しかし、その真偽に関しては厳密さを求めていた。

シカアレバ、偽撰正法眼蔵米袈裟卷アリ、種々ノ謬説  
ヲナシテ、後徒を惑乱ス、嗚呼イマ、偽説易立眞儀難  
興カナシ。<sup>35)</sup>

瞎道本光『大智偈頌関東辯矣』の研究(菅原)

現段階で、「米袈裟」卷なる一卷がどのようなものであるか、筆者は知らないのであるが、袈裟についての内容で、かつ、瞎道の立場からすれば、様々な謬説を含むものであつたことは分かる。実際に、江戸時代に入ってから『正法眼蔵』を論じる際に、主として行われた議論の一つに、真偽論がある。面山瑞方は、九五卷全体を尊重する立場であつたが、一方で天桂伝尊は、複数の卷について疑義を呈するなどしていた。その問題は、瞎道に及んでもまだ残っていたといえる。

また、瞎道は既に本論「五一②」で指摘したように、『正法眼蔵』を学人の参考書として指定し、更なる参究を促している。本書において、同様の指定がされたのは、以下の通りである。

- ・第一冊・二〇丁裏、「即心是仏」卷
- ・第一冊・三五丁表、「即心是仏」「発無上心」卷
- ・第四冊・二三丁表、「坐禅箴」卷
- ・第六冊・四五丁表、「袈裟功德」「伝衣」卷
- ・第六冊・四八丁表、「鉢盂」卷

儀規に関連する諸卷が顯著ではあるが、『正法眼蔵』か

瞎道本光『大智僞頌関東辯矣』の研究（菅原）

ら学びを深めるように、学人に促している。

更に、『正法眼蔵』を引用しながら『大智僞頌』を読解した箇所は以下の通り。

- ・第一冊・四丁裏、「唯仏与仏」巻
- ・第一冊・三二丁表、「仏性」巻
- ・第五冊・二七丁裏、「仏性」巻

宗旨として難解である文脈に、『正法眼蔵』を引用して、その都度結論に達している箇所である。他にも、出典の巻名を明記せずに引用される場合や、やや文章を変えて引用している場合は更に数えることが可能だと思われる。

そして、本書は和文で書かれているため、同じく和文の『正法眼蔵』は引用しやすく、様々に活用されたと推定される。

## 八、本書における瞎道の嗣法観

既に、本論「五―③」で『投子録』に関連した議論を挙げたように、瞎道は当時正統とされた「一師印証・面授嗣法」の立場に立つことは勿論だが、本書における嗣法観には以下の特徴がある。

### ①「合血」の尊重

『大智僞頌』「上瑩山和尚（第一首）」の註釈を通して、瞎道は「合血」を尊重する。

ナニモノカコレ血脈ナリ、七佛祖宗ミナ、カラ、嗣血ノ宣通ノミ、別ノ聲臭ナシ、〈中略〉佛祖ノ合血ハ、ヒトリ、フタリニ、アラズ、ミナナガラ是兒孫ナリ、是兒孫ノ面日佛アリ、面月佛アル、スナハチ七佛諸佛ヨリ、前頭ノ頭正尾正アリキ、コレヲ本師没駄没地トハイヘルモノカ。<sup>(36)</sup>

「合血」とは、道元『正法眼蔵』「嗣書」巻で挙げられた洞上『嗣書』作成の儀規だが、瞎道はこれを「師資の血脈が通じる」こととして捉えている。そして、その深意については、以下のように提示している。

師ヨリ合血スルカ、資ヨリ合血スルカ、合血ヨリ師トナリ、資トナルカ、合血ハ、師資ノ全皮全體ナリ、什麼人カ、コレ師面皮、イカナル面皮カ、マタコノ資眼睛、マサシクキハメテイハムニハ從何得、〈中略〉一切ノ佛祖ハ一切ノ佛祖已前ノ合血ナルヲモテ、同時合血ナリ、諸佛已後ノ唾血ナリ。<sup>(37)</sup>

「合」の意義について、師資一体を説くわけだが、この一体というとき、二見对待に陥ることを防ぐために、「合血」について、師から行われるものか、資（弟子）から行われるものか、それとも合血を通して師となり資となるのかなど、複数の視点を提示している。これは、宗門の「嗣法」を考えるとき、師から弟子に渡すべき何かが実体的にあるわけではなく、あくまでも正法眼蔵（瞎道は血脈と表現）を付与するのみであり、しかも、それは各々の仏祖が自ら目覚める自受用三昧を意図しているために、このような表現になったと思われる。それは更に「面授」の意義を考察することで真意を把握しておきたい。

## ②面授の意義について

江戸元禄期以降の曹洞宗では「一師印証・面授嗣法」を是としたが、この「面授」の意義については、いわゆる正統とされた卍山道白系統が、師と資とが面（顔）を付き合わせることを是とし、一方それは形式に墮するものだと、特に天桂伝尊系統からの批判があった。あるいは、天桂に影響を与えたとされる独庵玄光の面授観も特異な内容であ

晴道本光『大智偈頌関東辯矣』の研究（菅原）

るが、瞎道の場合は卍山系統の意義を受け継ぎつつ、更なる向上を図っていると指摘できる。

瞎道は、『大智偈頌』の「送瞿維那省本師」について、以下のように提唱している。

コノ省ハ、コキゲンウカガイニユクナリ、本師ハ面授  
面授ノユエニ、受面ノモノ、ソノ面授ノ師ヲ本師ト  
イフ。<sup>38</sup>

道元『正法眼蔵』「陀羅尼」巻の影響を受けつつ、面授面受した本師と明確に指摘していることから、いわゆる卍山系統を受けていることは明らかだが、真の参学という観点では以下の文脈も指摘できる。

アダニ皺面臭皮袋ノミ、相見スベカラズ、省ハキヲツ  
ケト譯スルモヨシ、合点シタガヨイト譯スルモヨシ。<sup>39</sup>

先と同じく「省」についての指摘から相見・面授を指摘した箇所だが、全く法に目覚めていないような皺面臭皮袋同士が相見することを是とするわけではないといえる。よって、何らかの境涯を要することは明らかである。

它亦曾不礼トキコフ、コノ因縁モチ、コノ句脈ヲ相見  
スベシ、礼スルハ知恩ナレドモ、真人人體ヲ相見セザ

瞎道本光『大智偈頌関東辯矣』の研究（菅原）

レバ、自它隔歴ス、不報恩<sup>(40)</sup>。

つまり、面前の師を礼拝するのみならず、真人人体への相見がなければ、自他の分別が起き、真実の報恩にはならないとしている。面授の礼拝について、ただの形式に墮することなく、内容を伴う必要を指摘している。

よって、本書における瞎道の嗣法観は、形式と内容の統合を図りながら、修証一等の妙旨を儀規の上で表現しようとしたと結論付けられる。

## 九、結論

上来、瞎道本光『大智偈頌関東辯矣』を通して、瞎道の宗学について検討を行ってきた。本書は祇陀大智『大智偈頌』を踏まえての提唱であるけれども、瞎道の註釈態度は高い宗乘眼からの提唱であり、文章の一文について、大智が込めた本来の意図を正確に表現するものではない。

ただし、それがかえって、瞎道本人の宗学の意義を強調するのである。その一々は本論の文脈に任せて再論はしないけれども、『正法眼蔵』を踏まえつつ、初学者に対して誤った理解をしないように指導する教育者の態度を見るこ

とが可能である。それは、本書が成立した経緯からも領けるものであるが、また瞎道自身が熱心に宗侶教育に従事したことの関連もあるといえよう。

## 註

- (1) 『菟書大成』卷一八、一二〇一頁
- (2) 『関東辯矣』第六冊、五三丁表〜裏
- (3) 『関東辯矣』第一冊、一丁表
- (4) 『菟書大成』卷一八、一二〇〇頁
- (5) 『吉祥寺史』からは、梅檀林に「肥前寮」が所在しており、同寺所蔵の日誌には、しばしば同寮の名前が見られるため、有力な寮舎であったと推定され、ここから本書と梅檀林との関係を考えて。しかし、これは更に詳細な検討が必要な事柄である。なお、寮名について、全国から集まってくる学僧達が、その地方地方によって一つの寮に集まり、その結果、寮舎に地域名を冠するようになったと推定されている（二六六頁参照）。また、瞎道『大智偈頌参註』は募刻識語に「江戸梅檀林吉祥寺知藏比丘」の名前が見え（『曹全』「注解三」、五四五頁下段）、関係が窺える。
- (6) 『曹全』「注解三」、五四三頁下〜五四六頁下
- (7) 『関東辯矣』第五冊、二六丁表参照

- (8) 『関東辯矣』第六冊、四八丁表参照
- (9) 『関東辯矣』第一冊、四〇丁表参照
- (10) 『関東辯矣』第二冊、三丁裏参照
- (11) 『関東辯矣』第二冊、二七丁表参照
- (12) 『関東辯矣』第三冊、二丁表参照
- (13) 『関東辯矣』第五冊、一四丁表参照
- (14) 『関東辯矣』第五冊、二二丁裏参照
- (15) 『曹全』〔注解三〕、三七三頁上
- (16) 『関東辯矣』第二冊、一九丁表参照
- (17) 『関東辯矣』第四冊、四三丁表参照
- (18) 『関東辯矣』第六冊、五四丁表参照
- (19) 『関東辯矣』第一冊、四丁表参照
- (20) 『関東辯矣』第六冊、一二丁裏〜一三丁表参照
- (21) 『全集一』三九頁
- (22) 『関東辯矣』第一冊、二〇丁裏参照
- (23) 賺道は、面山の諸活動を良く把握していたようで、例えば、『大智偈頌』に見える「礼永興開山塔」では道元の法嗣とされる詮慧(生没年不詳)の永興寺に關連して、面山が江戸時代に再興したことを挙げる(『関東辯矣』第六冊、一九丁表参照)。面山の事績は、「永興菴再興偈並序」(『面山広録』卷一二所収、『曹全』〔語録三〕、四九五頁下段)によれば、豊後から来た参禅者などが合議して、京都東山粟田口にある青蓮院の側にあった廢菴を買って面山の休息所にした際

賺道本光『大智偈頌関東辯矣』の研究(菅原)

- に、その場所柄、詮慧の「永興菴」を慕って名前を決めたとされる。そして、寛延元年(二七四八)閏一〇月一二日に、面山は同菴に入った。
- (24) 『関東辯矣』第一冊、四二丁裏〜四三丁表参照
- (25) 『洞上金剛杵』は、元文六年(一七四二)跋刊、宝暦五年(一七五五)刊が知られ、後者が『曹全』〔注解三〕に収録される。
- (26) 小早川浩大『洞上金剛杵』の考察、『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要(第11回)』二〇一〇年所収、参照
- (27) 詳細不明の割注である。書籍の保管場所を示すか。
- (28) 『関東辯矣』二〇丁裏〜二一丁表参照
- (29) 『関東辯矣』第四冊、二五丁表裏参照
- (30) 『関東辯矣』第四冊、二七丁表参照
- (31) 『関東辯矣』第三冊、三五丁裏〜三六丁表参照
- (32) 『関東辯矣』第六冊、二九丁表参照
- (33) 河村孝道『正法眼藏却退一字参』について、『蒐書大成』卷一八、一二〇二〜一二〇三頁
- (34) 『関東辯矣』第一冊、四五丁表参照
- (35) 『関東辯矣』第六冊、四五丁裏参照
- (36) 『関東辯矣』第二冊、二七丁裏〜二八丁表参照
- (37) 『関東辯矣』第一冊、四三丁表裏参照
- (38) 『関東辯矣』第五冊、三四丁表参照
- (39) 『関東辯矣』第五冊、二六丁表参照

瞎道本光『大智偈頌関東辯矣』の研究（菅原）

（40）『関東辯矣』第五冊、二六丁裏参照

### 参考資料

『大智偈頌関東辯矣』は愛知学院大学図書館所蔵（請求番号 188.8/02154/1～6）の明和八年（一七七二）写本全六冊を参照している。引用時には句読点のみ改め、濁点や漢字表記は原文に従った。

『大智偈頌』は『統曹全』「法語・歌頌」巻所収本を参照した。

『曹洞宗全書』『統曹洞宗全書』（曹洞宗宗務庁）なお、引用時には『曹全』『統曹全』〇〇と巻名と頁数を略記している。

永平道元の著作は春秋社『道元禅師全集』（全七巻）から引用。なお、引用時には『全集〇』とし、巻号と頁数のみで略記する。

『永平正法眼蔵菟書大成』（大修館書店）なお、引用時には『菟書大成』巻〇〇として、巻号と頁数のみで略記する。

岩本勝俊編『吉祥寺史』諏訪山吉祥寺・一九五三年